

同窓生シリーズ

⑩

感動

高橋康夫



第12回生 高橋康夫氏

昭和16年東京生れ 一橋大学卒業
NHKに入社、ドラマづくり20年
代表作 雲のじゅうたん/黄金の
日々/花へんろ/山頭火/七色村

をしたい」な
るて言える霧
囲気ではなく
て、まさに僕
なんか変わり
種のほうでし
た。文学座の
田島和子さん

皆悩んでいたんです。
今は受験勉強が当然の
ことと受け止められてい
ます。我々の時代は、ま
だ旧制中学の雰囲気があ
り、先生方もそうでした
が、「人生如何に生くべき
か」とか「自分で何なん
だろう」とか青っぽい議
論をしていたんです。文
学、哲学の部分を実剣に
悩んだり語ったり。そう
いう精神的風土が、新宿
にはあったように思えま
す。この年代に、自分で
何なんだろうと考えない
とだめなんです。

基が出来たのです。しか
し取材してみると、考え
ていたよりもっと大変な
ことだったんです。この
作品は実際の高校生の声
や作文から、ジェームス
三木先生が台詞に置き換
えたのです。

ゆきぶられ、心や体のす
き間から感情の何かがあ
くんです。感動なんてい
うとタサイといわれそう
だけれど、感動すると人
は素直になれるんです。
固い鼓から脱皮できるん
です。何か生きる意欲と
希望が湧いてくるような
これをやらせたら凄いと
いうものが育つんです。

だから僕たちの仕事は、
コチン、コチンとした心
の中に入り込み、心を揺
さぶる手伝いをするこ
となんです。

今回は、高校生を扱っ
たドラマ「翼を下さい」や
「うさぎの休日」(放送文
化基金賞大賞受賞)を制
作されたNHKチーフプロ
デューサー高橋康夫さん
に、お話を伺いました。

聞こえない叫び
無意識のうちに、学校
の格差を、人間的な差別
にしてしまうような状況
が、いかにも気の毒だと
思うんです。昔も今も共
通している聞こえてこな
い声を、大人が代弁する
のではなく、ドラマとい
う具体的な形で表すこと
ができるかと考えてい
たときに「翼を下さい」の

感動して欲しい
僕自身が多感な少年で
したから、自分が嫌にな
る。感情のもって行き場
がないという少年だった
から、特に思うんです。
とにかく、感動して欲し
い。自分はこの程度だけ
だと、マイナスの要素を
周りに置くと、石みたい
に固まっちゃうんですよ
ね。そこに感動という気
持ちは入り込む

新宿高校は程度の差は
あるけれども、個性伸長
という点ではかなり自由
を認めていた学校でした
ね。人格っていうのは、
バランスが必要なんです
よ。でも能力はアンバラ
ンスなもので、だから何
かできるヤツは尊敬され
る。

待つこと数分。別室で
のインタビューに、ここ
やかに答えて下さいまし
よ。話が進むほどにだん
だん熱っぽく、高橋さん
の多感な少年時代の思い
が伝わってきました。忘
れかけていたことを思い
出させてくれるようなひ
とときでした。

文学少年の頃
ドラマを作りたいと思
ったのは、実は高校時代
だったんですよ。でもそ
の頃とても「ドラマ作り
つけて花を開かせたいと

の部分を勉強に時間をかけ
ていましたね。何か面白
い自分の生き方を早く見
つけたいと

の部分を勉強に時間をかけ
ていましたね。何か面白
い自分の生き方を早く見
つけたいと

の部分を勉強に時間をかけ
ていましたね。何か面白
い自分の生き方を早く見
つけたいと

の部分を勉強に時間をかけ
ていましたね。何か面白
い自分の生き方を早く見
つけたいと